

ヘルマン・ホイヴェルス 『細川ガラシア夫人』（その二）

三 木 サニア

“Hosokawa Gracia” written by
Hermann Heuvers (Part 2)

MIKI Sania

Abstract

I presented the outline of the protagonist, Hosokawa Gracia's life and the author, *Hermann Heuvers* in Part 1, published in the last year's academic journal (No. 33).

In Part 2 in this issue, I would like to summarize the structure of the drama and its motif at first, and after introducing the story and its development, I would seek after the conversion drama of Hosokawa Gracia.

That is, in Act 1, the event during the lady's confinement in Mitono and her gallant and noble attitude to death without fear:

Visiting the church and encountering Christians at Shinyashiki in Osaka in Act 2:

I would like to focus on the joy of her being baptized in Act 3 and the lady's stunning end with her act and speech in Act 4.

It could be definitely said that the lady's baptized name, Gracia (the Grace of God) was the symbol of her way of life.

Key words : 1 Life & Death 2 the Grace of God 3 Takayama Ukon

キーワード : 1 生と死 2 神の恩寵 3 高山右近

一 はじめに

昨年度の『久留米信愛女学院短期大学研究紀要第三十三号』に発表された拙論「ヘルマン・ホイヴェルス『細川ガラシア夫人』（その一）」では、作者と細川ガラシア玉夫人の生涯を紹介した。

今回は、この戯曲の鑑賞を行う予定である。即ち、戯曲の構成とモチーフを概括し、その展開とストーリーを述べた後、夫人の回心のドラマを本作品から読み取っていくことにしたい。

二 戯曲の構成とモチーフ

本ドラマの舞台構成は、四幕八場より成るが、第一幕（序幕）のみ、丹後の三戸野（味戸野）の女城めじろと呼ばれるガラシア夫人の幽閉の地であり、第二幕以下は大阪玉造に新たに造られた細川忠興の屋敷内及び、切支丹の教会である。

時代は、一五八三年（天正十一年）夏から一六〇〇年（慶長五年）五月までの出来事で、玉の二十歳から三十七歳のことである。

この間、天正十年六月二日に起こった玉の父明智光秀の本能寺の変と父光秀の死、その後の二年間の丹後三戸野での幽閉生活の後、秀吉に赦されて大阪玉造の細川邸へ帰館。やがて、切支丹の教会を訪ね、その教えに導かれて受洗。切支丹としての宣教と有徳の生活の後、夫

忠興の上杉討伐の従軍中、石田三成の人質になることを拒否して見事な死を遂げた。その翌朝に行われた「葬送の場」で幕は閉じられる。

次に、作品のモチーフを考えたい。

本戯曲は、細川ガラシア玉が、信仰を求めて受洗し、信仰一筋に生きて、その道に殉じる生のプロセスを描いている。

作者ホイヴェルスの言によると、父明智光秀の叛逆による生命の危険と、深刻な生の問題に直面した後、切支丹の信仰を得ることで、「キリスト教的生命観にあふれた救いの心境」（長尾喜又「上演にあたって」）に到達し、最後は妻としてキリスト教徒としての道を全うして現世の生を終え、永遠の生命に生きたガラシア玉の生死のドラマを描いたものである。

これに因んで、ホイヴェルス師の注目する三つの言葉をここで取りあげておきたい。それは、「いただく」、「捧げる」、「落ち着く」の三語である。

「神父に聞く」（NHKテレビ「宗教の時間」一九六八年。聞き手は戸川敬一・土井健郎・森田明）によると、上記の三語について、ホイヴェルス師は、「自分の人生観とか、人生一般の意味を見事に説明する三つの言葉」であるという。以下、その理由を述べた文を引用する。

「いただくとかいただきます。これはてつべんとか頂までも、尊敬深く贈り物を抱き上げること。それから自分のものにする。それから捧げるは、反対にこつちから何か支度して、何かあげる。尊敬深く深い愛をもって、そしてこれによって人間は、世の中に、あるいは存在に於て落ち着く。その落ち着くの意味は何でしょうか。人生は、世の中で落ちるものだというのは当然なことです。（中略）落ちる、存在において落ちる。けれど着くというのは、どこか絶対的なものに着く。そのものは、堅い意志ですか、優しい神のみこころですか。

こうして人はまずいた、たく仕事をせなければならぬ。（中略）こうして人間の心もいくらか満足し、そして落ち着いて神のみこころに至ります。結局、信仰の問題ですね。

ここに引用された神父の注目する三つの言葉（日本人のモラルを示すもの）を本作品に適用すると、細川ガラシア夫人は、まず神からの贈り物としてキリスト教信仰を「いただく」き、それを「尊敬深く」抱き上げ、自分のものとした後、「尊敬深い愛をもって」苦しむ人々、貧しい人々を救う仕事にいらした。即ち、自らを「捧げる」わざに励んだ後、最終的には、存在において、神のみこころの中に「落ち着く」こととなったのである。

こうして、ホイヴェルス師のいう「いただく」、「捧げる」、「落ち着く」の三語は、細川ガラシア夫人の劇的で短い生涯を集約的に映し出すものであるということが出来る。以下、ドラマの展開に従って、その道のりを具体的に鑑賞していきたい。

三 ドラマの展開とストーリー

1 序幕

西暦一五八三年（天正十一年）の夏の朝。丹後の国。三戸野（現在は、「味土野」と表記される）

その一 三戸野の女城（玉の居所）の庭園で、小笠原少斎（細川家の家老）は、侍女の京原に、奥方の生命を奪うために秀吉が家来を差し向けたことを告げる。

その二 蓮池のほとりで、夫人は京原に向かって、ハスの花の気高さをたたえる。そして、自分は死を恐れないが、「迷い心を耐えることが、ただむずかしいだけ」であると、心情を吐露する。

そこへ少齋が来て、秀吉の家来の到来を告げ、お家の安泰のために夫人に生害（自害、自殺）をすすめる。

夫人は、それが夫の命令なのか否かを確かめ、夫の仰せでなければ自分は従わないと断る。

そこへ、秀吉の追手とともにやって来た細川家の家臣覚義が、殿（忠興）からの吉報を伝える。それは今回秀吉が浪速に、新しく立派な城を建てたので、春になれば奥方をそちらへ移すという報せであった。

2 第二幕

西暦一五八七年（天正十五年）の春の朝、大阪表

第一場 細川新屋敷の奥まった一室

忠興が薩摩の島津征伐に赴くので、留守中夫人を一步も外に出さぬよう、少齋に厳命する。

夫人は、夫の友人高山右近が忠興に語ったという、天地をつくった天の主、神の存在について、また、忠興が言った「心はしばまぬ。身は滅んでも魂は残る。」ということばに心をとめ、その理由を知りたいので、右近に尋ねてほしいと頼む。

第二場 同夫人の居室。前場より数刻の後。

夫人は「まことの道」を知るために、切支丹宗門の教えを受けに行くことを京原に打ち明ける。そして、気分がすぐれないので部屋にふせていることにして、誰にも気づかれずに屋敷を抜け出すことを計画する。

第三場 大阪市街、城の見える往来。吉利支丹宗門の家がある。前場

より時刻は続く。

夫人は京原とともに切支丹宗門の家を訪ね、セスベデス神父に会い、

人間の生死の理由、目的を聞く。やがて、ピンセンテ修士（日本人）が帰宅し、夫人はかねてから抱いていた人間と人生についての数々の疑問を聞いた。セスベデス神父は復活祭の祝い日に夫人たちを導いて下さったデウスに感謝する。

3 第三幕

西暦一五八七年（天正十五年）の夏。細川家の一室。

正時は少齋に、閔白がギリシタン追放令を出し、高山右近が追放されたことを伝える。細川家には十七名の切支丹がおり、その中の一人、侍女の京原を思う正時は、その身を案じている。

その後、夫人は京原の手で洗礼を受け、「伽羅舎、デウスのおいつくしみ」の洗礼名を授けられる。

このことを知った忠興は、侍女たちの受洗が外部へ露見せぬよう命じる。そして夫人の受洗を聞いて激怒するが、夫人は、天のお告げに従っただけだと言う。怒った忠興は十七人の切支丹を屋敷から尼寺へ追いやる。

4 第四幕

西暦一六〇〇年（慶長五年）五月

第一場 大阪表のある往来。

京原が得度してから十三年経ったが、正時は今なお京原への思慕を断つことが出来ない心境を覚義に語る。

第二場 細川家の一室

忠興は徳川方に従い、上杉討伐のため北陸道への東征に出発する。長男忠隆（十七歳）の初陣の時もある。忠興は少齋に、奥方を決して敵方に渡してはならないといい、いざという時には、屋敷に火をかけることを命じる。

第三場 別の一室。前場から数日後

石田三成の使者が来て、奥方を入質として引き渡すことを要求する。それを拒否した少齋は、忠興の命に従い、煙硝を屋敷の内部にまくように用意させる。

殿の意向を聞いた夫人は、家臣たちにあくまで抵抗し、立派な最期を遂げるように命じ、屋敷内の女、子供は、隣の切支丹の家に逃がすよう京原と正時に頼む。そして子供たちへの遺言として「心を正しく生きることを」を娘の多良に言い残し、イエズス、マリアの御名を唱えながら少齋の太刀の下で絶命する。

葬送の場 翌朝のあけぼの時

オルガンテイノとピンセンテ、京原、多良、侍女たち、家臣登場。
ピンセンテの祈り

—幕

四 ガラシア夫人の回心のドラマ

1 三戸野の幽閉時代

序幕では、まず三戸野幽閉時代の、夫人の憂いに閉ざされた世界が示される。それは、侍女京原に向かって打ち明けられる言葉、「天下一倅せ者だった私が、今では一番の不幸者であることを……」によって表わされる。

孤独と不安、寂寥の暗黒世界に生きる夫人にとつては、庭園の蓮池に咲く白いハスの花を見ても、その無垢な天竺的な美しさを賞でることすらなく、いずればしぼんでしまう運命を先取りする虚無的な心情なのである。

夫人 京原。……この白い蓮の花は、こんなにも輝き、香るものな

のに、本当の美しさに満ち満ちているのに……いつかは、今のこの私のように不倅せになって、泥の中にしぼんで落ちてしまうのはなぜじゃ。なんのために、こんなにきれいに咲いているのか？ 思えば真実悲しいこと。

京原 昔から人がいうように、ただ無というものが、白い泡と生まれ、そうして、消えて行くだけでございましょう。

夫人の心は、この世は「無」であり、あてになるもの、信じることのできるものは何一つ見出せないと思いつつも、虚無に安住し切れず、何か信じるに足る永久的なものを求めていることが想像できる。

夫人 でも、この花をごらん。(からだをかかめて) 無というものが、こんなに美しいものをつくるものと思えますか。そうして、意地悪くもうちこわして行くものと思えますか。

夫人は、中世の人々を支配していた仏教的無常観——「諸行無常」、「栄枯盛衰」の世にあつて、万物の本質を「無」と観じつつも、なおも絶対的な何ものかを探さずにはおられないのであろう。それを夫人は、「迷い心」として抑止しようとするが、そこに生じる二つの心の矛盾葛藤が次のセリフに表わされている。

夫人(前略) 無というものは弱いもの、迷いという悪鬼が生じたなら、

この花も私たちもどう苛まれるか知らぬのじゃ。

このように「迷いという悪鬼」に苛まれる夫人であるが、次の場面では、武家の妻としての毅然たる態度が示される。それは、秀吉の手の者が、夫人を成敗するために女城にやって来るとの知らせが入り、家老の小笠原少齋から生害(自害)をすすめられた時のことである。

夫人 自害せよとか。誰の命じゃ。父上は、たとえ非道の者、謀反人の汚名を受けても立派な武士でありました。私とてその娘、死を恐れてはおりませぬ。死んで父上のおとに従うも、子としてのつとめであろう。だが、今は夫に嫁した身の上じゃ。私のからだ、私の命、これ、みな夫のもの。まず夫に従うが女子の第一のつとめではあるまいか……少斎殿、そなたは忠興殿の命を受けて、かく取り計らわるるのか。

ここで夫人の述べた、夫の命に従うのが、女子の第一のつとめであるという倫理は、封建時代の女子に課せられた「三従の徳」によるものであろう。

即ち、子供の時代には、親の命に従い、嫁しては夫の命に従い、夫の死後は、息子の命に従うべきだとする儒教の教えに基づくもので、この時代の女性の鉄則であった。ところが、死の使いとして、覚悟のうえで夫人を迎えた秀吉の家来たちは、実は大阪へ夫人を迎えるための吉報をもたらす使いであった。その時の夫人の喜びは、詩の形で表現される。オペラ等では、アリアとして歌われる箇所であろう。

夫人 あまり喜んでではありません。

これもまた迷いのきずな

新たなさざなみ

陽の中で、白く光る泡、

ほんのつかの間よ。それは

すぐ、深い底知れぬ谷間に、

投げ込まれる。きつと……

無の中より、無の中へと……

(中略)

私の幸福、私の誇り、
さからつてはみても、
やはりだめ。

京原、主人が私を呼んでいます。
咲きたい心を、花よ、そなたは
抑えることができておいでか。

新たなおやしきで、
けれど、蓮の花にたずねます。

いつまでも、
そなたを育て、花を咲かせてくれるのは、どなた……と。

この世の生は、死を常に前提としている。死のかげを持たぬ生はありえない。そして、生死の問題の究極に、最後に提起された疑問、すなわち、存在の根本原因としての超越的な何ものかへの問いかけが浮上するのである。

2 ガラシアの回心と高山右近

ガラシア夫人の回心には、高山右近の存在が少なからぬ影響を与えていると思われるが、このドラマに右近は直接登場しない。

田中澄江の『がらしあ・細川夫人』⁵⁾では、玉の回心に直接関与する高山右近をたびたび登場させているが、ホイヴェルス師の『細川ガラシア夫人』には、ガラシアと右近の対面や対話の場は設けられていない。ただ、右近は忠興と親しい関係にあり、忠興を通してデウス(神)の存在がガラシアの耳に入り、その心に間接的に影響を与えた人物として登場する。

以下は、忠興が秀吉に従って島津征伐に出陣する前の会話である。

夫人(前略) 一体、どなたがこうして、私たちに花咲く力を与え

て下さるのか。

忠興 そなたは何が知りたいのじゃ。そのようなことを知ったとて花咲く力が増しすまいに。ただ、喜びを失うばかりであろうが。

夫人 桜の花が、まばたきます。そのまばたきが、私を驚かしませう。誰かが、この世の遙かな果てから、私にまばたきをするのです。

忠興 恐れてはいけない、かわいい余の花よ。千よろずの花々がそなたを驚かさないうにしたいものじゃ。

夫人 誰であろう、まばたきをするのは……あの荒ぶれた迷いの心か。いや、いや、あの恐ろしいものが、このようにやさしくまばたきをするはずはない。

忠興 恐れてはいけない、誰もまばたきなどするものはない。恐れずに、そつと咲いておらねばならぬ。

ここで夫人がしきりに訴える「まばたき」とは、忠興が気にする世間的な関心によるものではなく、玉の心の奥深く隠されていた、超自然の世界、超現実的な何ものかからの交信であつたのではなからうか。

「誰かが、この世の遙かな果てから、私にまばたきをするのです。」人間には、生まれながらにして、「神へのあこがれ」が心に刻まれている。それは、「神によつて、神に向けて造られている」人間に対し、神はたえず人間を引き寄せようとして、何らかのサインを送っているのではなからうか。夫人の心の奥深く存在する超自然的存在への憧憬が、このようなサインを「まばたき」として感知したと考えられるのである。

この会話に引き続き、忠興が夫人に語つた「人間は、花よりも、草木よりも、山よりも何よりも大切なものじゃ。」という発言が、夫人の心を捉える。

夫人 私たちは、花よりもつと立派なものでしょうか。

忠興 (突然、なぞのように) おう、それは、高山が知つていゝはずじゃ。

夫人 高山様が、なんとおつしやいました。私たちは花より立派なものとおつしやいましたか。

忠興 うむ、高山が、一度こんなことを申したことがある。人間は、花よりも、草木よりも、山よりも何よりも大切なものじゃと言つた。

夫人 何よりも、でございますか。

忠興 そのように高山は申していた。

夫人 どんな意味でございましょう。

忠興 高山はキリシタンじゃから、天の主とかを、天地をつくつたものとかを神として信じているのじゃ。それはたしかデウスとか申しておつたな。

夫人 デウス……(黙然と考える) そのお方が、深いところから、蓮の花を引き上げたのでございましょうか。そのお方が花の枝をもつて、私にまばたきするのでしょうか。デウス様と申さるるおん方が……

この場面における「高山はキリシタンじゃから、天の主とかを、天地をつくつたものとかを神として信じているのじゃ。それはたしかデウスとか申しておつたな。」という発言こそ、夫人の運命を左右する重要なものであつたといえる。

高山右近がガラシア夫人に与えた影響について、ホイヴェルス神父は対談「神父に聞く」のなかで次のように語っている。

こうしてガラシア夫人の夫細川忠興は千利休の弟子として高山右近と会います。信仰をもっている右近は間接に夫人達に信仰のメツ

セージを運びました。そこで夫人は直観的に耳で聞き、心で認めることが出来ました。その瞬間からこの人はもう完全な信仰の道をおみしました。そして不幸も相変わらずありましたけれど、非常に勇ましく、殉教でもないけれども、美德の為に命を捧げました。これは私にとって大変具体的な一つの解釈であって、その為に私はガラシア劇を熱心に作り出しました。

ここで忠興と親交があり、ガラシア夫人の回心に間接的影響を与えたというキリシタン大名高山右近について、日本カトリック教会の最近の動きを見ておきたい。

二〇一〇年二月二十八日付「カトリック新聞」によると、二〇〇九年度の臨時司教議会（二〇一〇年二月十五日〜十九日）で、ユスト高山右近の列福理由を「殉教者」として、日本司教団が推進していくことが承認された。従来は、「証聖者」（キリストを証しし信仰を擁護したため迫害を受けた人）として列福を推進していたが、それよりも列福が認められやすい「殉教者」の列福事由に変更したのである。

また、二〇一一年二月二十七日の「カトリック新聞」には「高山右近の霊性確認」の見出しの下に、列聖列福特別委員会は二月十四日から十七日までの臨時司教総会で高山右近の霊性を確認し、その列福運動を推進することに合意したことが記されている。

さて、右近の語った「デウス」即ち天の主、天地をつくったもの、天地万物を支配する力を持った根源的な何ものかに惹かれたガラシア夫人は、「まことの道を知るために」侍女とともに切支丹宗門の教えを求めて教会に赴くのである。

彼女が求めてやまなかったもの——この世の全ての存在の根源としての神、この世を創り、それを支配しているおん者「デウス」を発見したときの喜びは、次の場面で最高調に達する。

それは、第三幕、復活祭の当日に教会を訪れた夫人が、セスベデス

神父とイルマン（修道士）ピンセンテに出会い、その導きで遂に入信を決意し、やがて、侍女京原の手で洗礼を受け、ガラシアの霊名を与えられた喜びの場面であり、そこは本作品の圧巻といえる。

まさに詩人としてのホイヴェルス神父の信仰とガラシアへの思い入れが一気に進り出た表現ではなからうか。

京原 奥方様の、新しいお名前、それはガラシア——
夫人 ガラシア——私への主のほほえみ。

京原 そのほほえみのもとで、奥方様の心の初花が芽ばえます。

夫人 ガラシア——私への主の久遠の愛。

京原 その愛のいぶきのもとに、はじめて、喜びの泉が湧きいでます。

夫人 ガラシア——わが主のお許しのくちづけ。

京原 そのくちづけのもとで、デウスのおん子、わがはらからとなるのでございます。

夫人 ガラシア——乾いた土に注がれる、ハライソの露。

京原 その露にうるおされて、心の園に実が結びます。幾たびとなく……。

受洗後のガラシアは、オルガンチノ神父（註）の指導に従い、ひたすら従順と忍耐によって夫の激昂をしずめるように努めた。義弟の興元も、ガラシアの受洗に反対していた姑も、遂には、ガラシアの徳に感化されてキリスト教徒となった。

また、忠興は、子供たちが洗礼を受けることをも許し、「見出しうる限りの腕さきの職人の手で彼女のために聖堂をさえ建て、自ら工事の監督にあたったほどであった。」と「日本婦人の亀鑑 細川ガラシア夫人」（ヘルマン・ホイヴェルス『細川ガラシア夫人』一二二ページ）に記されているが、受洗後の夫人の生活は、ドラマの中に具体的

には記されていない。

3 「洗礼」の秘跡と「ガラシア」の名について

ここで、カトリック教会における「洗礼」の秘跡と「ガラシア」の名前の意味について、解説を加えておきたい。

「洗礼」とは、キリストによって制定された新約の七つの秘跡のひとつで、キリスト教の入信の秘跡である。洗礼を授かることによって、「わたしたちは罪から解放され、神の子として生まれ変わり、キリストの肢体となり、教会の一員となつて、その使命に参与する者」となるのである。すなわち、「洗礼は水とことばによる再生の秘跡」なのである。

通常、洗礼を授けるのは、司教又は司祭であるが、緊急の場合には、聖職者あるいは信者のみでなく、未信者でも授けることができる。

ガラシア夫人の場合も、夫人が、屋敷外に出て教会に赴くことが出来なかつたため、侍女の清原マリア（この作品の場合は、京原）が、緊急洗礼を授けたのである。

ガラシア夫人の場合、この恵みはまさに待ちに待った至福のときであり、最高の恵みであった。それが、第三幕の夫人と京原との美しい応答に示されている。

次に、夫人の洗礼名の「ガラシア」について考えてみたい。

「ガラシア」は、神の恩寵を意味し、「主の祈り」とともにカトリック教会でもっとも頻繁に唱えられる「聖マリアの祈り」の冒頭に用いられている。

ラテン語では、「Ave, Maria, gratia plena, Dominus tecum」(アヴェ、マリア、グラチア プレナ、ドミニヌス テクム) (後略) という祈りで、口語訳では、「恵みあふれる聖マリア、主はあなたとともにおられます」と言われる。

これは、ルカ福音書一章十八節の、大天使ガブリエルが、おとめマ

リアのもとに遣わされ、神の母とされることを告げる場面、すなわち、「受胎告知」(お告げ)の言葉である。その中の「グラチア」が、キリシタン用語の「ガラシア(ガラサ)」にあたり、恩寵、恩恵、聖寵等の訳語がある。

『どちりいな・きりしたん』所収の天使祝詞(アヴェマリア)には、「ガラサみちみち給ふマリアに御礼をなし奉る」の文言が見られる。

神の恩恵は、教義的には、人間をイエズス・キリストの救いにあずからせる神の恵みであり、人間の本性と能力を越えているので「超自然的恩恵」とも呼ばれる。

洗礼によって、成聖の恩恵に与った人は、「人間を神の前に正しいものとし、神との親しい交わりに入らせ、神の子とし、神の生命にあずからせ、永遠の喜びを得る資格を与え」られるといわれる。

「成聖の恩恵を受けた人間は、聖霊の実であるよいわざを行ない、愛の道に進むように召され」、そのわざは「永遠の生命において報いられ」るのである。

受洗後のガラシアは、その名の通り、神の恩寵によって「全く別人」のようになった。彼女の正義感、その愛によって円熟した。腰元たちに対する厳しい非難叱責に代えるに、今や彼女たちの欠点短所に対して慈愛深い眼差しを向けた。とも記されている。細川夫人は、まさにガラシアの名に価する理想の女性となつたのである。

4 ガラシア夫人の最期

時は移り、第四幕の一六〇〇年(慶長五年)五月、細川ガラシア夫人に、不朽の名を与えた壮烈な最期の場面が展開される。前の場面から十三年後のことであった。

この場面の夫人のセリフから、その死生観を考えてみよう。

夫人 どのようなことであれ、私は決して驚きませぬ。十三年も

の間、私は死というものに向かいあつて参りました。

夫人 ……そうであつたか……私は死ぬのを拒みはしませぬ。殿のお言つけとあれば……。しかし、そなたたちは自害をしてはなりません。それこそ天の掟にそむくこと。敵に討たれるまで、最後まで戦うことじゃ。

夫人 私は天への道を急がねばならぬ。泣くではない。私は喜んで行くのじゃ。それが殿のお言いつけなのじゃ。

夫人 遠い遠いお国へ行きます。ハライソという天国じゃ。あなた方より先へ行きます。母が最後のことばじゃ。よいか、心を正しく持つということ。心が正しくさえあれば、やがて、また会える時がきつとある。忠隆や、忠利にもよう伝えておくれ。心を正しく生きるのじゃ、と。

天国への憧れは、キリスト教信者にとつて究極の理想であるが、このドラマにおいて、夫人が子供たちに最後に言い残した「心を正しく持つということ」は、この作品の独自性の一つを不ずものと思われる。夫人の辞世の歌へ散りぬべき、時知りてこそ世の中、花は花なれ、人は人なれ¹⁵は、ガラシアを描いた作品のすべてに引用されている普遍的なガラシア像の象徴である。しかし、この「心を正しく生きよ」という教えは、ホイヴェルス神父のガラシア劇独自のものであり、ここに本作品の倫理性を見出すことができよう。

人の人たるゆえんは、神の似姿として創られた人間の靈魂にあり、不滅の魂こそ、人間の尊厳性の源といえる。従つて、神の声である良心の声に聴き従う正しい生き方こそ、人間らしい生き方であり、死後の永遠の生命もそこから約束されるのである。

ドラマの最終場面「葬送の場」でのピンセンテのことばは、神のみもとに帰つたガラシアの魂をたたえる美しい賛歌として、人々の胸を揺さぶることであろう。

幸いなるかなガラシア／地上のあらゆる苦しみは／今や限りなき楽園にて／報いられん／祝福あれ、ガラシア

五 おわりに

細川ガラシア夫人の生涯は変転極まりない運命に翻弄された茨の道であつた。いわば十字架を担つてカルワリオの丘上にあえぎ登るイエス・キリストのような、苦難の人生であつた。

しかし、「ガラシア」の洗礼名の示す通り、主の恩寵によつて、この世においても後の世においても、真の幸せを得ることのできた「恵みあふれる」人生であつたともいえる。

新約聖書のマタイ六章に出てくる、「まことの幸い」¹⁶を体験しつつ、この世の生を過ごし、八散りぬべき時¹⁷を知つて、潔く三十七年の生涯を閉じたのである。

ホイヴェルス師の『細川ガラシア夫人』は、まさに、ガラシア夫人が、神から頂いた恩寵と至福を、見事に描き出したドラマといえるのではなからうか。

注記

- (1) ヘルマン・ホイヴェルス『細川ガラシア夫人』一〇五ページ
- (2) 『ホイヴェルス神父―信仰と思想』一八七―一八八ページ
- (3) 一五八七年(天正十五年)六月十九日秀吉は筑前箱崎において高山右近を追放、次いで伴天連追放令を発した。翌二十日、秀吉

は宣教師の二十日以内の国外退去を旨とする伴天連追放令を改めて諸大名に布告。その直後の七月に清原小侍従は、玉に洗礼を授けている。

(4) 高山重友。天文二十一年〜元和元年(二五五二〜一六一五)。

右近大夫。ロレンソから受洗、洗礼名はジュスト。荒木村重の寄騎で、村重謀反の折織田信長の意を受けたオルガンティノによって翻意。慶長一九年(一六一四)マニラへ追放、同地で没した。

(5) 『現代日本キリスト教文学全集六「信仰と懷疑」』教文館、昭和四十八年五月二十日。初出「新劇」昭和三十四年三月号。同年二月文学座上演。

(6) 人間は神によって、神に向けて造られているからです。神はたえず人間をご自身に引き寄せておられます。人間はただ神のうちにだけ、求めてやまない真理と幸福を見いだします。(『カトリック教会のカテキズム』一七ページ)

(7) (2)と同じ、一九〇ページ

(8) 享祿三年〜慶長十四年(一五三〇〜一六〇九) イエズス会司祭。元亀元年(一五七〇) 来日。京都でフロイスを助け、後に、ミヤコ布教地区長となった。慶長五年(一六〇〇)、玉の死の翌日、葬儀を行った。

(9) サクラメント。隠れた神秘を示す感覚的しるし。

(10) キリスト教教理の意。キリシタン時代に日本で刊行されたカテキズム(公教要理)、すなわち教理入門書。

(11) 『カトリック教会のカテキズム』三八〇ページ

(12) 『カトリック要理』一〇六ページ

(13) 同上

(14) 『細川ガラシア夫人』一一二ページ

(15) 「山上の垂訓」の冒頭部、マタイ五章三節から十二節に記された八項目の教えで普通「真福八端」と呼ばれている。

参考文献

- 細川ガラシア夫人 ヘルマン・ホイヴェルス 春秋社 一九六六年三月二十日
- 細川ガラシアのすべて 上総英郎編 新人物往来社 一九九四年六月十日
- ホイヴェルス神父―信仰と思想 土井健郎・森田明編 聖母の騎士社 二〇〇三年四月二十日
- 現代日本キリスト教文学全集六「信仰と懷疑」 田中澄江他 教文館 昭和四十八年五月二十日
- カトリック教会のカテキズム 中央協議会 二〇〇二年 七月三十一日
- カトリック要理(改訂版) 中央出版社 昭和四十七年十二月二十日
- 岩波キリスト教辞典 岩波書店 二〇〇二年六月十日
- (二〇一一年三月三十一日受稿)